

ラムジュン・ヒマール

頂上で感動の握手

ヒマラヤ登山史上初のランデブー

6分會(四山) 吉野和記

あかね色に染まるマナスルを目前にして、久住山にでも登るような軽気持で出発の準備を整える。昨日までの永く険しかったルート工作、ただ広い雪原を腰までもぐり、雪と岩のミックスした壁を慎重に登り、ナイフの刃のような雪の稜線に靴の幅だけの足跡をつけ、足のつま先が痛くなり、感覚がなくなるまで登り続けた水壁。シエル・達がおぎな合ったキャンプの休養目。身体が大きく傾き、辛じて止まった雪原の崩落。



戦争の悲惨さ訴える感動の映画

『ひめゆりの塔』観賞

文化統一行事きまる

反核映画「人間を返せ」も

7月11日(日) 10時15分から

今回の文化行事は、実行委員会が検討されたのち、委員会承認されました。映画「ひめゆりの塔」の観賞ですが、統一行事の七月十一日は、午前十時十五分開会、十時三十分運動で作られた反核映画「人間を返せ」が併映されます。この機会を逃さないよう可能な限り統一行事に参加して下さい。入場券は組合員一人につき一枚あて配布されます。なお券は上映期間中有効です。会場は大牟田太陽館。七月三十日まで上映。

解説

映画史に残る名作「ひめゆりの塔」が二十九年ぶりに輝く。大牟田三十一人の若手女優が参加した感動を呼んだ前作同様、水木洋子のオリジナル脚本を巨匠今井正が演出。校歌の中の「ひめゆり」を敢行。今井正のメガホンは女と呼ばれた女生徒たちの、真実のたのびた道を真正面から見つめたドラマにふたたび挑む。物語は神細さのなかに、青春の全てを捧げていた乙女たちのほかならない運命を追う。

キャストは先生役に栗原小巻、篠田三郎。軍医に田村高広。注目の



天候は悪かったが、第二登で韓国隊とホワイトアウトのサミットランデブーを果たした吉野さん(中央)

頭が痛くて動けなかったキャン・プ・1の一日。戦術の検討に夜がふけるのも忘れたメンバーとのデスカッション。苦しみも喜びも今日一日で決まる。

頂上への期待感と不安感、そしてここまで来た安堵と複雑に交錯し時は流れる。

しかし、快晴無風の天気も途中から急変し、すべての条件を悪くしたものにした。

薄い酸素と寒さの上に、風雪はこれを増幅させ、苦しい呼吸はさらに苦しさを増す。

視界は五ないし六メートル、吹きつける風雪はまっ毛を凍らし、視界をせまくする。

ヒマラヤの恐ろしさが身にしみ、頭に刻みこんだ、頂上へのル

頭が痛くて動けなかったキャン・プ・1の一日。戦術の検討に夜がふけるのも忘れたメンバーとのデスカッション。苦しみも喜びも今日一日で決まる。

頂上への期待感と不安感、そしてここまで来た安堵と複雑に交錯し時は流れる。

しかし、快晴無風の天気も途中から急変し、すべての条件を悪くしたものにした。

薄い酸素と寒さの上に、風雪はこれを増幅させ、苦しい呼吸はさらに苦しさを増す。

視界は五ないし六メートル、吹きつける風雪はまっ毛を凍らし、視界をせまくする。

ヒマラヤの恐ろしさが身にしみ、頭に刻みこんだ、頂上へのル

頭が痛くて動けなかったキャン・プ・1の一日。戦術の検討に夜がふけるのも忘れたメンバーとのデスカッション。苦しみも喜びも今日一日で決まる。

頂上への期待感と不安感、そしてここまで来た安堵と複雑に交錯し時は流れる。

しかし、快晴無風の天気も途中から急変し、すべての条件を悪くしたものにした。

薄い酸素と寒さの上に、風雪はこれを増幅させ、苦しい呼吸はさらに苦しさを増す。

視界は五ないし六メートル、吹きつける風雪はまっ毛を凍らし、視界をせまくする。

ヒマラヤの恐ろしさが身にしみ、頭に刻みこんだ、頂上へのル

頭が痛くて動けなかったキャン・プ・1の一日。戦術の検討に夜がふけるのも忘れたメンバーとのデスカッション。苦しみも喜びも今日一日で決まる。

頂上への期待感と不安感、そしてここまで来た安堵と複雑に交錯し時は流れる。

しかし、快晴無風の天気も途中から急変し、すべての条件を悪くしたものにした。

薄い酸素と寒さの上に、風雪はこれを増幅させ、苦しい呼吸はさらに苦しさを増す。

視界は五ないし六メートル、吹きつける風雪はまっ毛を凍らし、視界をせまくする。

ヒマラヤの恐ろしさが身にしみ、頭に刻みこんだ、頂上へのル

頭が痛くて動けなかったキャン・プ・1の一日。戦術の検討に夜がふけるのも忘れたメンバーとのデスカッション。苦しみも喜びも今日一日で決まる。

頂上への期待感と不安感、そしてここまで来た安堵と複雑に交錯し時は流れる。

しかし、快晴無風の天気も途中から急変し、すべての条件を悪くしたものにした。

薄い酸素と寒さの上に、風雪はこれを増幅させ、苦しい呼吸はさらに苦しさを増す。

視界は五ないし六メートル、吹きつける風雪はまっ毛を凍らし、視界をせまくする。

ヒマラヤの恐ろしさが身にしみ、頭に刻みこんだ、頂上へのル

る二二年、東宝創立五十周年記念作品として全国公開される。

夕暮れに沈む校庭に集合した全生徒二百人は静かに母を後にした。従軍看護婦として野戦病院に從軍する日がきたのだ。

花城露子は娘百合橋と母と別れてきた。残つてくれとせがむ母に、露子はただ「行ってまいります」としかいえなかった。

上原文とチヨの姉妹は空襲で両親を失っていた。二人は校内で送りを受ける安富良子と安里恒子の姿をさみしげに見つめていた。

その中には「マダム」とあだ名される、嘉浦春子の明るい顔もあった。病院は丘の中腹に掘られた壕に設けられていた。従軍服に着がえた生徒たちは慣れぬ手つきで壕を掘った。玉井先生も男に混じって、唯一の女性教師宮城先生も先頭立って生徒たちを励ましていた。

ついに米軍が上陸、病院にもやがて危険が迫ることを知った先生たちは、卒業式だけはあげさせてやりたいと思った。その夜、狭い兵舎で式は行われた。照明弾と砲

撃をぬって全員の証書が校舎から運ばれた。ロソクの光が制服姿を浮かべさせる。文とチヨ、嘉た。宮城先生やチヨたちは懸命に土を掘った。文は九死に一生を得た。

安富は逃げなかった。胸にこんな弾丸は彼女から立ちあがる力を奪っていた。「覚悟しています……さようなら」安富は先生が差し出した劇薬を静かに受けとった……

生徒たちは持てるだけの医薬品と、傷ついた友を背負い南へと出発した。泥濘の一本道はあえぎ声と激励の怒号に満ち、あだかも死の脱走競争の様相を呈していた。

夜を徹して歩いた。極限状態の生徒たちを宮城、玉井先生は必死に励ました。そして次の夜、生徒たちはついに平和な部落にたどりついた。

美しく広がる草原や畑。青く澄んだ空。何カ月ぶりの陽光を浴びて、ひめゆり学徒は乙女にもどった。豊かなせせらぎで文とチヨたちは水浴を楽しんだ。そして宮城先生との再会を心から喜んだ。しかしそれもまたつかの間の平和でしかなかった……

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

ついでに犠牲者が出た。治療班の生徒は貴重な薬品を失うまいとするあまり至近距離で受けた。安富は機銃弾を胸に受けた。安里や前山はガス弾を浴びてしまった。

病院長佐々木中佐は苦悩の決断を下した。歩行可能な患者と医療班をつれて南へ退避するとい

釣りキチ余談 連載第八回
愛竿の巻
十九分會(三川) 石田 鈍竿

釣りの面白さは、天候、釣り場の状況、湖などの条件をよく見て自然に遊泳する対照魚をいかにして釣るかにある。

魚信までの静から、魚影を見えるまでの張りつめた動へ。全神経を集中して魚とたたかう。仮りにその時、他の人が、十万円やるから手を出せ、といつても振り向きもしないだろう。

最近、三池港周辺の釣りにマキ餌が流行した。九州屈指の好釣り場で、そこまですることはないだろう。

誰かが型のいいのを釣り上げると、「フーン」と押しかけ、その人を不快がらせるのはいい方で、ポイントから追い出されることにもなりかねない。残念なことである。

せめて、その人の了解を得て割り込むぐらいの最低のマナーくらいは守ってもらいたいと思うのは俺一人ではないはずだ。

説教意味になったが勘弁してもらおう。

いつからだだったか、灯台の主とまでいわれた赤竿のおじさんがいた。それに対抗して青く塗れようでもしたら、目をすり上げて、青年の青年といわれ、常連連に一目置かれた一時期があった。

今は、金さえ出せば多少の不満はあってもすぐに使えるクラス竿があるが、当時は竹竿で、俺の場合全部竹の手造りだった。

そんな時「釣りキチ余談」を書こうかなあという気になり、ペンを握る。